

阪神

今日も1日

ワンだふる!



①

「あんたも苦労したは、そう声をかけられんやねえ」。2017年6月、NPO法人「日本レスキュー協会」(伊丹市)の「セラピー犬」として初めて福島県に「里帰り」した雑種犬の雌「そら」(6歳)

「あんたも苦労したは、そう声をかけられんやねえ」。2017年6月、NPO法人「日本レスキュー協会」(伊丹市)の「セラピー犬」として初めて福島県に「里帰り」した雑種犬の雌「そら」(6歳)

「里帰り」で被災者癒やす

セラピー犬 そら (伊丹市)



フラフープをくぐり抜ける訓練をするセラピー犬のそら
伊丹市下河原の日本レスキュー協会で

そらの母親は「もも」と言い、東日本大震災に伴う東京電力福島第1原発の事故で長期避難を余儀なくされた福島県飯館村の高齢夫婦の元にいた。村が計画的避難区域に指定され、全村避難が始まった11年5月、協会は避

4頭の子犬を産んだ。その1頭がそらだ。阪神大震災を機に設立した協会は災害救助犬の育成が中心だ。だが、犬と一緒に訪れると被災者の表情が晴れることがあるという阪神の経験から、セラピー犬という名称は根づいた。キャッチポー

セラピー犬は、慰問と、先でトラブルが起きないよう、奇声や拍手に過剰反応せず、食べ物の飛びつかず、手のひらの菓子は歯を立てずに食べる。などのルールがある。そらもこれらを身に

難先に連れて行けない犬を一時的に預かることにした。保護されたももは妊娠しており、兵庫に着いて3日後、フラフープをくぐり抜ける訓練をするセラピー犬のそら

いていなくても、人の心を癒やす犬を育てる。そらを成もしてきた。そらを引き取った協会広報の今井雅子さん(40)が、郷を訪れた。他のセラピー犬に交じって川内村と白河市のデイサービスセンターを訪問。今井さんが、そらは飯館村で被災したももから生まれたと紹介する

【生野由佳】保護犬、狩猟犬、牧羊犬、警察犬、介助犬、そしてペット……。犬と人間は古くから強い絆で結ばれている。今年、改めて犬と人間の関係「ワンだふる」な関係に迫った。